

書評・この一冊

「毛沢東最後の挑戦」

桑原寿二・柴田穂・中嶋嶺雄 ほか

(ダイヤモンド・タイム社・1200円)

中国のことは、なかなかわかない。中国問題研究の第一人者である桑原氏が「文革、これは非常に複雑怪奇で、ほくらも玄人らしい顔してると、さつぱりわからぬ」とい

とはいえ、そんな評者でも何となく、中国で起こっていることの意味なり背景なりを考える糸口を教えてくれるのが本書である。

まず、読みやすい。そして、おもしろい。

本書は、東大のいわば「老中青」の同窓の三氏、桑原寿二

・柴田穂・中嶋嶺雄を中心にした名の学者・専門家の討論をまとめたものである。

御三方にしても、決して意見が一致しているわけではないが中国を情緒的ではなく実証的に分析するという点において、共通の研究姿勢を保っており、それだけに、説得力ある話が展開されている。

第一部、毛沢東と周恩来のドラマ、第二部、中国経済の挫折と再建、第三部、「毛・周以後」をめぐる権力闘争、第四部、「国家外交」か「革命外交」か、第五部、毛沢東最後の挑戦、とあるが、そのいずれもがキメの細かい整理がされており密度も濃く、座談会ものとしては出色の編集といえよう。

巻末の資料も手がこんでおり特に「天安門事件の背景」と題する論稿と政治体制図がよい。

書評

本書は、台湾と日本の中国問題研究家の論文集である。

わが国では紹介されにくい台湾の学者の論文が収められているのはありがたい。何と云っても彼らは中国人。体制

「現代中国の政治と経済」

吉田忠雄・李天民編著

(新評論社・1800円)

なり思想の相違はあれ中国的考へ方や発想の共通項をもっているだけに、その

分析には、刮目されることが多い。

本書は、十一章により構成されており、それぞれが勉強になる。特に第一章「中国における歴史と現代」村松暎論文と第三章「果てしなき同志の闘争」李天民論文がタメになった。

〔ルポライター・清水高志〕

空間にユートピア的幻想のヴェールをかけ……と。

共産主義者たちは、「そこに共産主義思想があるから信仰する」といった姿勢で、自己の根源的思索から出発せずして、主観者々となってしまう。さらに、それが、「収容所」国家にいたる道であることをなせば知りながら。

全体主義共産主義が誘惑的な相貌を濃くしている今日、われわれは、人間の精神と社会のあり方を、生と死の深淵から問ひなおしてゆく必要があるのではないか。

本書の中には、近代人の悲劇と果敢に闘ってきた先人たち、キルケゴール、マルクス、ウェーバー、シモーヌ・ヴェーユ、そしてサルトルやカミュ等の思想が明解に紹介され、検証されている。そしてそこに、哲学としての民主社会主義思想の新展開への芽が若々しく息づいている。

ちなみに、本書（昭和四十八年刊）は氏の『経済哲学』三部作の最終巻にあたる。（日向陽介）